保育をつなぐ

～ お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ～

Vol.7

職員室
―子どもたちの拠り所

嶋田博美

シリーズ「保育をつなぐ ～お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信～」第7回は、職員室で仕事をする事務補佐員の方に思いを綴っていただきます。

子どもたちは園生活の中で、教員、用務員、事務職員とそれぞれの立場で働く大人と出会い、かかわります。とはいえ、子どもたちにとって、園内でかかわる大人がどういう立場で働いているのかは、あまり大きな意味はもたないのかもしれません。事務の仕事が主であっても、子ども理解や子どもへの働き掛け、そして担任との連携には、多くの配慮や工夫が込められているように思います。子どもたちにとっては、どの大人も大切な先生です。また教員にとっても、職員室で共に仕事をする時間の中で、忙しさやうれしさ等々を共有する存在です。

筆者の子どもとのかかわりや子ども理解は、教員や保護者にも多くの示唆を与えてくれるのではないでしょうか。

嶋田博美（しまだ ひろみ）
お茶の水女子大学附属幼稚園事務補佐員。

＊

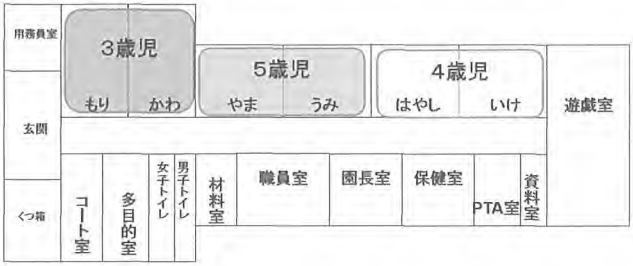
以前、保育者として働いた経験があり、子どもたちの傍らで再び仕事ができたらうれしい、そんな思いもありながら、幼稚園の事務補佐員として、日々忙しく駆け回る先生方をサポートし、早いもので今年の9月で5年目を迎えます。

幼稚園での生活

私が一日の大半を過ごすのは、園舎の中心部、年長「海の組」の前に位置する職員室です（下図）。電話や来客応対、配布物の準備や会議室の手配、会計にかかわる事務処理などにあたっていますが、行事の手伝いで調理をすることや、子どもと言葉を交わす機会も多く、園児とは毎日何らかのかかわりがあります。そのため、机に座ってコツコツと作業をする一般的な事務の仕事とは少し違う雰囲気で働いています。

子どもたちは、登園して支度を済ませると、保育室や園庭、遊戯室や廊下に保健室と、さまざまな場所で思い思いに遊んでいます。中には職員室に来る子もいますが、滞在するのはだいたい5～10分程度の短い時間で、毎年顔ぶれは年長児が中心です。たまに勢いよく扉を開けて飛び込んでくる年少児も。そして3学期に入る頃には、照れた笑みを浮かべた年中児が、一人もしくは友達と一緒に訪れるようになります。

園内見取り図



職員室から眺める園の風景

幼稚園の庭には、春にタケノコ、夏に梅、秋には柿やシイの実、冬は夏ミカンなどが豊かに実り、先生と子どもたちは収穫した後、タケノコならば小さく切ってスープにしたり、梅は凍らせて氷砂糖に漬けてジュースにしたり、シイの実ならばフライパンで炒るなどのいろいろな調理をして、園の生活で自然の恵みを味わっています。

こうした活動が始まると職員室でも、副園長先生と私で夏ミカンなどを人数分に切り分け、お弁当の時間や降園前に間に合うよう保育室へ持っていく日々が続きます。

私はこちらの幼稚園に来て驚いたことがいくつかあります。園児が皆、スーパーマーケットではまず見かけることのない青くて酸っぱそうな夏ミカンを食べて、「いい匂い」「酸っぱいけどおいしい！」とうれしそうに味と香りを楽しんでいる様子や、柿の味見をして、どれが渋柿かを当てようと、自分の舌で渋みの感覚を知ろうとしていることなどです。今の時代に都会で暮らす子どもが、自然をありのまま、全身で受け入れて喜びを感じている姿はとても新鮮で印象に残っています。

「〇〇くんはね、柿を採るのがすごく上手なんだよ」と、大きな柿がたくさん入った籠を大切に抱えて、洗ってほしいとやって来た子どもが詳しく話してくれます。今年は豊作なのか不作なのか、どの木の、どの高さの柿が甘いのか、渋いのか、そして誰と誰が一緒に遊んでいて、柿の収穫を楽しんでいるのか、外の様子が手に取るようにわかるのです。園児たちは、静かな職員室にも扉を開けて四季折々の風景を運んできてくれます。こうした調理活動などに携わることは、私自身にとっても、日々の発見や感動につながる貴重な体験になっています。

職員室を訪れる子どもたち

職員室を訪れる子どもには、それぞれ何らかの目的や用事がある場合もあれば、ちょっとひと休みしたいなど、その姿はさまざまです。子どもたちに私からは、できるだけ担任の先生に「これから職員室に行ってきます」と伝えてから来るようにと声をかけています。

描いた絵や路線図、作った物を見せてくれる子、作った工作が壊れてしまったので直して補強してほしいと持ってくる子、読んでいる本や遊んでいる道具を少しの間預かっていてほしいという子、鉛筆を削ってほしいという子、特に用事はないけれど静かな所で過ごしたくなったという子、先生や友達を探している子、自分の落とし物が届いていないか聞いてくる子、一人ひとりの気持ちを聞きながら、次第に子どもの顔と名前がわかるようになります。

よくある光景なのですが、先生に頼まれたお使い事をもって、年長児が2、3人一緒にやって来ることがあります。お皿やスプーン、菜箸やおたまじゃくし、水切り籠やコップ、塩やしょうゆといった調味料などを「職員室でもらってきてね」と、先生が子どもに託しているのでしょう。先生たちは恐らく、託したことを子どもが理解し、職員室に行ってきちんと伝えることができますようにとお使い事に願いを込めている、……私はその思いを受け取っていました。

そのため、目の前にやって来た子どもが何を取りに来たのか、どうしてほしいのかをよく聞き取り、必要なものを用意するのですが、例えばお皿やスプーンなど、いくつ必要なのかは聞かずに来てしまうこともあります。

私は「数はいくつ持っていく?」と尋ねて子どもに決めてもらうのですが、一瞬「どうしよう……」と友達とお互いの顔を見合った

後、その場で小さな会議が始まります。A児が「今日は山（の組）と海（の組）の両方に使うから、三つか四つあったほうがいいかな」と言えば、B児が「じゃあ、3人で来ているから、一人一つずつで、三つ持っていこうよ」と言い、C児が「そうだね、足りなかったらまた来ればいいよね」と話しあって決まります。

このようなほほ笑ましいやり取りも、職員室のキッチン前でよく繰り広げられています。

ある園児との出会い

鉄道ファンの園児によく出会うのですが、今年も全国の電車や路線、駅名に詳しい子がいました。「（職員室は）静かだから」と言ってよく一人で来て私の隣の椅子に座り、全国の路線図や、自分の心の中にある〝空想の路線図〟というものを黙々と書いていました。複雑な東京の地下鉄にも詳しく、○○駅から○○駅に行くための最短の乗り換え方法を教えてくれたり、よく乗る電車や使う駅がどこかといったことを、私はパソコンに向かい、その子は紙に向かいながら話していました。

しばらくたったある日、ふと「そういえばあの子は最近来なくなったな」と気づくと、友達と一緒に保健室で書き物をしている姿を見かけました。久しぶりに「ねえ鉛筆貸して」と職員室に来たので、「最近は何して遊んでいるの？」と聞くと、「○○くんと路線図書いてる」と答えました。二人とも鉄道ファンだと知っていましたが、「○○くんは僕より駅に詳しくて書くのが早い

の。上には上がいる」と私に言いました。友達の良いところを認めて、自分ももっと頑張ろうと思っている気持ちが伝わり、温かい気持ちになりました。そして、一緒に楽しく遊びながら切磋琢磨できる良い友達との出会いがあったことを私もうれしく思いました。

保育者の一人として子どもとかかわる

その子に限らず、職員室に一人で来て時間を過ごしていた子どもがある日から来なくなると、だいたい、友達と一緒に遊んだり走ったりしている様子を見かけます。毎日のようにそばで見ていた顔が遠くなるのは少しだけ寂しいけれど、子どもが職員室に来なくなるということは、困っていた何かが解消されたとか、友達との出会いがあったなどの良い兆しなのかもしれないと思うようになりました。

私は、かつて保育者として勤務していた職場で、3歳児クラスの担任をしていたときに、右肩を脱臼するけがを負いました。治療を続けたものの、度重なる肩の不調に悩まされ、完治は難しいと病院で診断を受けました。子どもを抱えたり、一緒に走ったり体を動かしたりすることや、テーブルや重い物を持ち運ぶといった日常的な動作も長くできないと将来への限界を感じていた中、現在の園にご縁を頂き、入職して事務補佐員に着任しました。

職員室は、決して遊び込む場所ではないけれど、何かあったときには私を頼って訪ねられる場所で、先生ほど身近ではないけれど、頼りにできる大人がいる場所だと、園児が心の片隅に感じながら幼稚園で過ごしていてくれたらいいなと願っています。